

社会関係資本は「限界集落」を救えるか？(1)

——過疎地域住民の生活満足度に関する研究——

東京大学大学院 姫野宏輔

1. 目的

65歳以上の高齢者が集落人口の過半数を占め、集落機能の維持・再生産に困難をきたすような過疎集落においても、そうした集落での生活に強い満足感を持ち、終生の定住を望む人々がいる。そのような人々の強い生活満足感や定住志向は、どのような社会的背景から生じるものなのだろうか。本報告の目的は、過疎地域に暮らす人々の一部に見られる強い生活満足感の規定要因を明らかにすることである。

2. 方法

そこで本報告では、2011年度から2012年度の2年間にかけて実施された、東京大学文学部・人文社会学研究科「社会調査実習」にて得られた、過疎化の進む長野県内の3地域に暮らす人々を対象としたアンケート調査の結果を分析に用いる。この調査では、2011年度は長野県塩尻市のうち、旧・檜川村に属する地域を、2012年度は長野県阿智村清内路および長野県上高井郡小布施町を対象とした。

質問紙の配布に際しては、エリアサンプリングの手法を用いて、(株)ゼンリン作成の住宅地図を利用し、住宅地図上で住所と世帯主の氏名が確認できた世帯を選び出し、全戸に郵送にて質問紙の配布を行った。2011年度の有効回答数は345（回収率：50.4%）、2012年度の有効回答数は546（回収率：52.0%）であった。

塩尻市は長野県のほぼ中央に位置する、人口7万人弱の市である。このうち檜川村は、2005（平成17）年に塩尻市と市町村合併を行った地域であり、現在は行政上の「村」としては存在していない。この村を構成していた三地区——北から順に贅川・木曾平沢・奈良井——の区分については、現在も大字という形で存在している。阿智村清内路は、長野県の南西端に位置する、人口700人弱の山村である。もともとは「清内路村」として独立した行政区であったが、2009（平成21）年に隣接する阿智村に編入されたため、現在は行政区分としては存在していない。上高井郡小布施町は、長野県の北東部に位置する、総人口11,000人弱の町である。近年、「栗と北斎と花の町」というフレーズで大々的な町おこしを行い、観光地として急速に知名度を高めている。

3. 分析の結果

以上の3地域を対象とする質問紙調査の回答結果を参照すると、まず単純集計の水準においても、人間関係に関する生活満足度（友人関係・家族関係）が、全国調査における同様の生活満足度に関する質問項目の集計結果よりも高い数値を示していることが明らかであった。やはり過疎地域において、強い生活満足感を持つ人は一定程度の割合存在している。

そのうえで生活満足度を従属変数とする重回帰分析を行い、各種の地域活動に参加する頻度が高く、ソーシャルキャピタルを多く保有していると思われる人ほど、これらの生活満足度が高まる傾向にあることが明らかになった。

4. 結論

本稿の知見は、集落機能の維持・再生産が困難になっている集落であっても、住民間でソーシャルキャピタルを醸成することにより、集落活性化の土台を一定程度作ることができることを示した点で、中山間地域の過疎化が進行する現代日本社会にとって、重要な意義を持つと言える。

[文献]

Putnam, R. D., 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon & Schuster. (=2006, 『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』 柏書房.)

宍戸 邦章, 2009, 「中高年の地域ボランティア活動促進要因と地域生活満足度—JGSS-2006に基づく分析」 大阪商業大学 JGSS 研究センター・東京大学社会科学研究所編『日本版 General Social Surveys 研究論文集(8)』 大阪商業大学 JGSS 研究センター, p. 41-65.